

論文審査の要旨

| | | | |
|--|----------------|-----|---------|
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 （ 教育学 ） | 氏名 | 河 原 麻 子 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1・2項該当 | | |
| 論 文 題 目 | | | |
| <p style="text-align: center;">盲ろう者の社会参加を取り巻く情報入手・提供経路に関する現状と課題 －就労に至るまでの過程に焦点を当てて－</p> | | | |
| 論文審査担当者 | | | |
| 主 査 | 教 授 | 若 松 | 昭 彦 |
| 審査委員 | 教 授 | 川 合 | 紀 宗 |
| 審査委員 | 教 授 | 伊 藤 | 圭 子 |
| 審査委員 | 准教授 | 林 田 | 真 志 |
| 〔論文審査の要旨〕 | | | |
| <p>本論文は、盲ろう者が就労を実現するまでの過程に焦点を当て、就労等に関する情報の入手・提供経路における困難を軽減するための条件を探索的に検討したものである。本論文は、序章と第1章、第I部（第2～4章）、第II部（第5～6章）、ならびに終章から構成されている。</p> <p>序章及び第1章では、「盲ろう」の定義や盲ろう者が抱える生活上の困難や課題、盲ろう者の就労を取り巻く現状に関する知見をもとに、研究の目的と3つのリサーチ・クエスチョンを設定した。</p> <p>第2章（研究1）では、盲ろう者にむけた情報提供の実態と課題を明らかにすることを目的とし、盲ろう者を支援する立場にある関係者（以下、盲ろう支援者）を対象として、13項目からなる質問紙調査を実施した。30名の盲ろう支援者より回答が得られ、量的データの単純集計及び質的データのSCAT（Steps for Coding And Theorization）分析を行った。分析の結果、盲ろう支援者は主にコミュニケーションや移動に関する情報を盲ろう者にむけて提供していること、ならびに、それらの情報は盲ろう者のそばにいるときに直接提供されていることが示された。盲ろう支援者が情報提供において抱えている困難として、①福祉制度の規定上、情報を提供可能な時間数が制限されていること、②情報を伝える過程において難しさがあること、③盲ろう者友の会（以下、友の会）に所属していない盲ろう者にむけた情報提供に難しさがあること、の3点が挙げられた。</p> <p>第3章（研究2）では、盲ろう者による情報入手の実態を明らかにすることを目的とし、友の会に所属する盲ろう者を対象として、22項目からなる質問紙調査を実施した。43名の盲ろう者より回答が得られ、量的データの単純集計及び質的データのSCAT分析を行った。分析の結果、盲ろう者は情報入手に関して、視覚・聴覚情報の不足による活動制約に加え、情報通信機器の使用に関する困難、人的支援の不足による困難を抱えていることが明らかになった。また盲ろう者は、友の会のメンバーとつながることで、社会資源に関する情報を入手しているという1つの経路が示された。</p> <p>第4章では、第I部（第2・3章）の結果をもとに、盲ろう者の情報入手・提供経路を取り巻く現状と課題に関する総合考察を行った。</p> | | | |

第5章（研究3）では、就労を実現している盲ろう者がどのように情報を入手し、就労の実現に至ったかを明らかにすることを目的とし、盲ろう者を対象として半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。企業に就労している盲ろう者1名と高等教育機関に就労している盲ろう者1名よりインタビューデータが得られ、それらの質的データを複線経路・等至性モデリング（TEM; Trajectory Equifinality Model）の手法を用いて分析し、TEM図を作成した。分析の結果、特別支援学校（視覚障害）高等部専攻科での学習経験が、キャリアパスに活かされていることが明らかとなった。また、盲ろう者が就労に至るまでの過程においては、自ら求人情報等にアクセスした過程、専門機関を通して情報を入手した過程、関係者や家族に相談したことで就労に結びついた過程、があることが示された。そして、自身の障害に関する認識が就労を選択する後押しとなったものの、他方で盲ろう者の就労の難しさが窺えるエピソードも見られた。盲ろう者の就労可能性に関しては、当事者のみならず、雇用者を含めた多くの関係者にむけて啓発する必要性が考えられた。

第I部及び第II部の結果をふまえ、第6章では総合考察がなされた。盲ろう者が就労を実現する過程における情報入手・提供経路に関わる困難を軽減するための方策として、①盲ろう者が就労に関する情報を入手しやすい体制の構築、②盲ろう者が就労先で得ている合理的配慮に関する情報の蓄積と共有、③学校教育段階から就労に必要な情報を認識し入手するための指導・支援、の3点を挙げた。

終章では、研究結果の総括と研究の限界点、ならびに今後の展望について述べた。研究の限界点として、①盲ろう支援者、盲ろう者ともに、十分な対象者数を確保できなかったこと、②盲ろう者の実態によっては質問項目の内容理解が困難な可能性も考えられたこと、③当事者に加えて関係者に対してもインタビュー調査を実施することで、より詳細なTEM図を作成できた可能性があること、の3点を挙げた。今後の展望としては、①情報の入手・提供経路として友の会以外の団体・機関にも焦点を当てること、②就労に至るまでの過程において後押しとなった、家族や学校教員等による支援内容を詳細に分析すること、③就労を実現している盲ろう者の体験やライフヒストリーに関わる情報をさらに蓄積していくこと、の3点を挙げた。

本論文は、以下の2点において高く評価できる。

1. 盲ろう者の就労実現のために必要となる情報の入手・提供経路の実態と課題を明らかにするとともに、今後の盲ろう者支援に関する研究において、情報の入手・提供経路を視点の一つとして導入していく必要性を示した。
2. 世界的にも数少ない盲ろう者の就労事例を取り上げ、就労に至る過程における情報の入手・提供の実態を明らかにするとともに、就労を希望する後進の盲ろう者にむけて貴重な資料を提供した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 3年 2月 2日